

他者と共にある

明治学院大学 ボランティアセンター長補佐 猪瀬 浩平（教養教育センター 准教授）

明治学院大学では阪神・淡路大震災における学生の自発的な支援活動の経験を経て、1998年にボランティアセンターが設立された。学生たちが大学の外の〈世界〉と出会う手がかりをつくとともに、多方面で展開される学生のボランティア活動のアドバイスをおこない、実践に取り組む学生が反省的な学びを深めるサポートをしてきた。本年度より、ボランティア実践と大学での学びを有機的に結びつけるためのサティフィケート・プログラムも開始されている。

1. 明治学院大学ボランティアセンターの歴史と理念

明治学院大学のボランティアセンターは、学生たちの自発的な活動の中で生まれたことを、私はこのセンターのスタッフの一人として誇りに思っています。1995年の阪神・淡路大震災発生時、自発的な救援活動のために多くの学生が被災地に向かいました。それがきっかけとなり、学生と教職員がパートナーシップを築きながら活動する学内の独立した組織としてボランティアセンターは設立されました。本学の創設者ヘボン博士は幕末の日本でキリスト教精神に基づいて無償の医療活動や、「ヘボン塾」での教育活動、聖書翻訳、和英・英和辞書の編纂などの数多くの社会貢献活動をおこないました。そのようなヘボンの志が明治学院で学ぶ多くの学生に引き継がれ、それがボランティアセンターの設立を導いた学生たちの活動にもつながっている、と私たちは考えます。

2. 組織体制

現在、ボランティアセンターに所属する学生メンバーは、「横浜・白金地域活動」、「『Do for Smile @東日本』プロジェクト」、「海外プログラム事業部」、「明学レッドクロス」、「SHIP (Social Hub Information Partners)」、「MGパール」、そして「1 Day for Others」、「学生事務局」といったグループ・プロジェクトにそれぞれに所属し、多様なフィールドで活動を展開しています。

学生をサポートする専門職員として、白金・横浜各校地にボランティアコーディネーターが

配置されています。専門的知見を活かしてボランティアを実施する学生の企画をサポートするだけではなく、外部のボランティア団体、NPOやNGO、行政などとのネットワーク作りや、学生たちが実践を通じた学びを深めるためのサポートをしています。単に「良いことをした」で終わらせるのではなく、それぞれの活動がなぜ行われているのか、その活動が解決を図る問題はどんな社会的背景の中で生まれていくのか、その活動の支援が届いていない人はいないか——ボランティア実践の中で生まれる問いは尽きることがなく、またその問いに向き合い続けるなかで世界に対する問題意識を高めていくことが大切だ、と私たちは考えています。

ボランティアセンターの活動が活発に展開されるなかで、事務職員も増員されています。大学全体のガバナンスや、教学マネジメントや広報、キャリア支援などの専門性をもったスタッフが配置されることにより、ボランティアセンターの活動は、大学全体の活動との有機的なつながりを深めています。

センター長やセンター長補佐は教員が務めるとともに、各学部・教養教育センターからそれぞれ1名の運営委員が出され、重要事項についての審議を行います。また、外部の有識者に活動推進委員としての助言を受けています。

3. 活動内容：「Do for Smile @東日本」プロジェクトと本学独自のボランティアファン ド学生チャレンジ賞

多岐にわたる活動の全てを紹介する紙幅はありませんので、2つに絞って活動内容を紹介し

ます。

「Do for Smile @東日本」プロジェクトは、東日本大震災の発生直後から、岩手・宮城の両県で緊急支援活動を始めました。その後、岩手県大槌町では吉里吉里地区を拠点に、子どもの遊び場づくり、学習支援、地域コミュニティ作り支援などの活動を展開してきました。活動の中で地元の方言のアーカイブ化がはじまり、それが「吉里吉里カルタ」制作、そのカルタを活用した地元の小学校・中学校の授業支援へとつながっていきました。



吉里吉里カルタを活用した小学校「ふるさと科」の授業

同じく陸前高田市では小学生のためのスタディツアーを4年にわたり企画するとともに、「けんか七夕」「うごく七夕」など地元の祭の運営を手伝うなどの地域活動を展開しています。そのほかに、宮城県気仙沼でも復興支援プログラムを展開していました。

東日本大震災という大災害に学生や教職員が向き合うなかで、大学と東北の沿岸地域との間に新しい関係が生まれ、学生たちの多様な活動が生まれています。それとともに神奈川・東京という都市部にある大学の学生が三陸沿岸の地域社会とであうことで、地域のつながりの大切さを学び、自分たちの暮らしを見直すきっかけにもなっています。

ボランティアファンド学生チャレンジ賞は本学学生のボランティア精神を支援し、自発的な社会貢献活動を促進するための助成金です。大学ロゴの入った「明学グッズ」の本体価格の10%を原資とし、学生が企画した社会貢献

プロジェクトに対して奨励金を支出するものです。単発の企画を「スタートアップ部門」として応募可能とした本年度は、これまでよりも多数の応募があり、11団体が採択されました。

4. 教育理念“Do for Others”の実現にむけた新たなプログラム

本年度からは、全学的な取り組みとして、すでに活発に行われてきているボランティア実践と、大学の学びを融合させていく、「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」を開始しています。①135時間以上のボランティア実践、②各学部と、共通科目を担当する教養教育センターが指定した科目のうち16単位の修得、③ボランティア実践と、大学での学びを結びつけるための手がかりをつくる「インテグレーション講座(3回)」を受講した学生にサティフィケート(修了証)を授与する仕組みです。このプログラムを立案するなかで、学生の自発性を重視する観点から、ボランティア活動自体の単位化はしませんでした。

一方で、すでに大学で提供されている教育とのつながりを強化することで、学生自身の専門的学びとボランティア実践双方が深化することを期待しています。同時に、このプログラムの意味を深めていくなかで、これまでボランティアセンターと直接的な関わりのなかった教員たちとも連携しながら、共生社会の担い手を育成する明治学院大学らしい新しい教育システムが生まれることを目指しています。



第1回インテグレーション講座
[Unlearning(学びほぐし)]をキーワードにグループワーク